

ちいさな住人たちと モザイクタイルの不思議な町

ーモザミュータイルラボ・リレープロジェクトでの企画・展示ー

橋本雅好研究室 企画 渡部華音

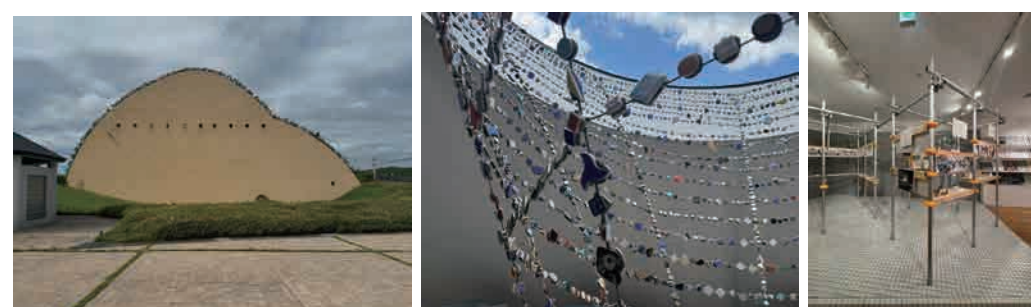


背景

多治見市モザイクタイルミュージアムは、2016年に建築家・藤森照信氏によって建てられた、日本で唯一のモザイクタイル専門の美術館である。

地域に根付いたタイルの歴史や文化を伝える場として機能しており、本制作は同館で行われる「モザミュータイルラボ・リレープロジェクト」の一環として位置づけられる。

同プロジェクトは、タイル産業の関係者と教育・研究機関が連携し、新たなタイルの魅力や可能性を探究する取り組みであり、ミュージアム2階スペースを用いてリレー形式で展示が行われている。



コンセプト



モザイクタイルに 命が宿る町

目的

モザイクタイルの製造工程一つの町として再構成し、素材の誕生から完成までを“建物”や“生き物”に見立てて表現する。
工程を可視化することで、モザイクタイルという素材の背景や魅力をより身近に感じてもらうことを目指す。

スケジュール

多治見市モザイクタイルミュージアム



2024年10月9日
現地調査を行った。
タイルが「物語を持った素材」であることに気づいた。

中間発表



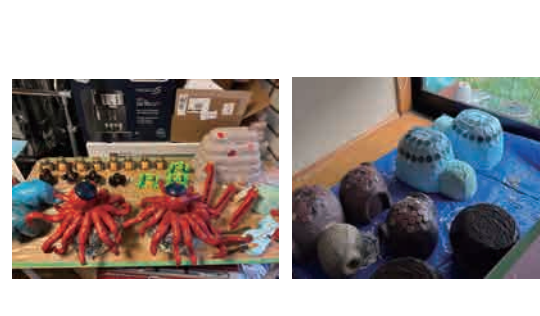
2025年5月30日

資材提供



2025年7月

模型制作



2025年9月-10

広報活動



2025年11月

クロストーク



2026年1月22日
多治見市モザイクタイルミュージアム関係者、愛知淑徳大学 清水研究室、協賛企業の方々とともにクロストークを実施した。

工場見学



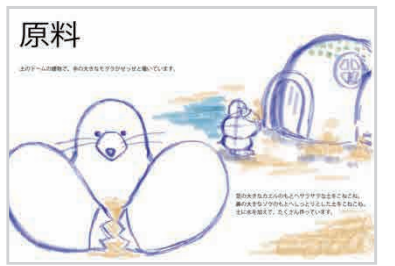
2024年10月9日
調査の一環として、多治見市内および周辺地域のタイル関連工場の見学を行った。

キックオフ



2025年8月4日
多治見市モザイクタイルミュージアムにて、愛知淑徳大学 清水研究室と一緒にタイルの施工方法を学ぶキックオフを実施。

プレゼンボード
制作制作



展示開始



アンケート
調査開始

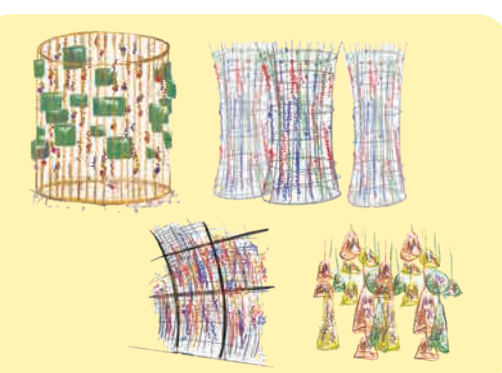


シール
配布開始



発想の転換

①タイルのすだれを参考



2月上旬頃

②2階との繋がりを表現



2月下旬頃

③タイルの在り方



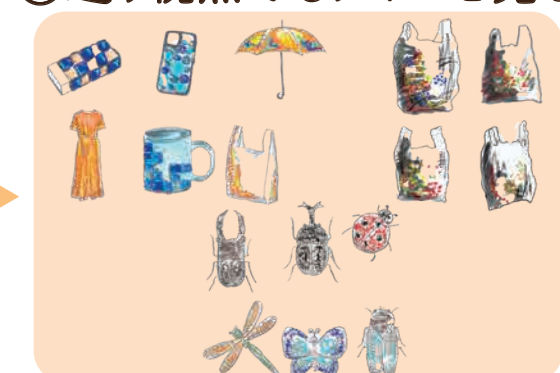
3月上旬頃

④藤森照信氏の建物に着目



3月下旬頃

⑤違う視点でもタイルを見る



4月上旬頃

⑥製造工程に着目した町



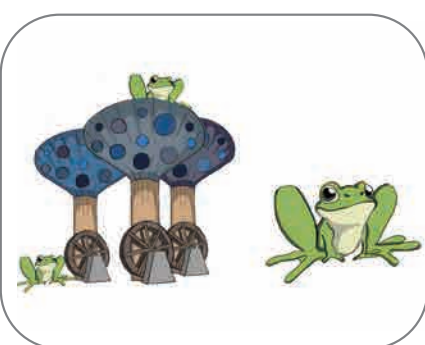
5月上旬頃

ラフスケッチ

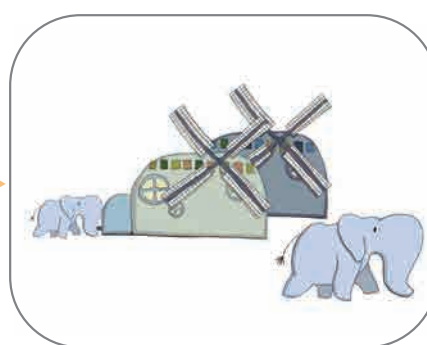
1. 原料



2-1. 乾式プレス成形



2-2. 湿式押出成形



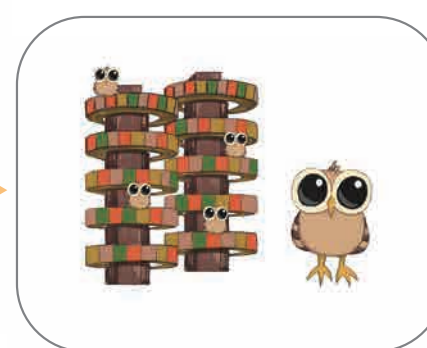
3. 釉薬



4. 焼成



5. 検品



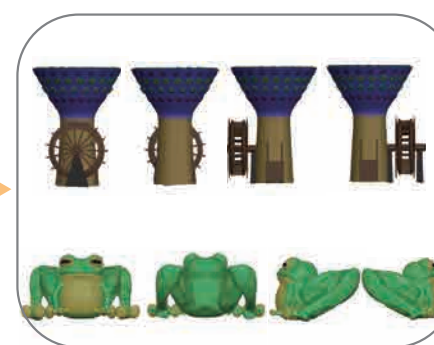
制作にあたっては、まずモザイクタイルの製造工程および展示コンセプトをもとに、ラフスケッチを行った。
町全体の構成や各工程の関係性、建物と生き物の役割を視覚的に整理しながら、工程が「物語として連なって見える」構成を模索した。

3D モデリング

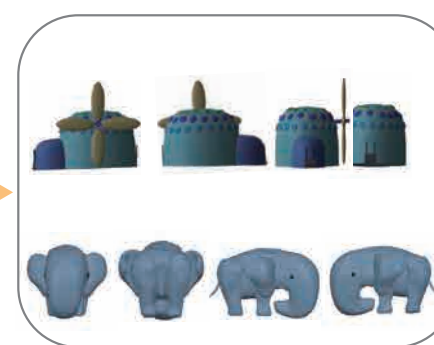
1. 原料



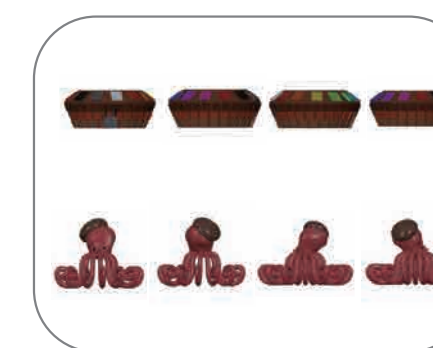
2-1. 乾式プレス成形



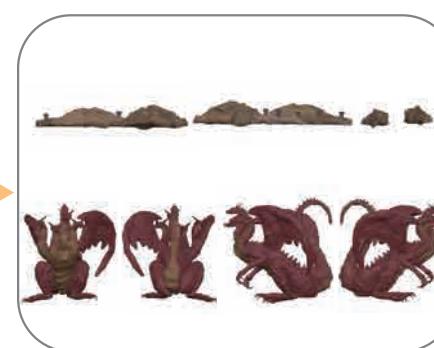
2-2. 湿式押出成形



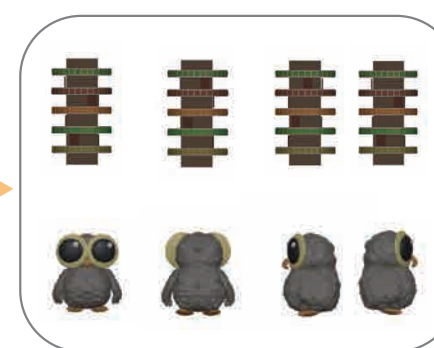
3. 釉薬



4. 焼成



5. 検品



スケッチで整理した構成をもとに、「Nomad Sculpt」を使用し3Dモデリングを作成した。立体化することで、建物や生き物のスケール感、町全体の高低差やリズム、展示空間とのバランスを具体的に検討した。

空間パース



空間パースでは、来場者が展示空間の中を歩きながら、モザイクタイルの製造工程をひとつの物語として順序よく巡ることができるよう構成を意識している。

展示は「原料」から始まり、「成形」「釉薬」「焼成」「検品」へと進む一方の流れを基本とし、町の中を移動する行為そのものが、モザイクタイルが生まれ、完成に至るまでの過程を追体験することにつながるよう計画した。

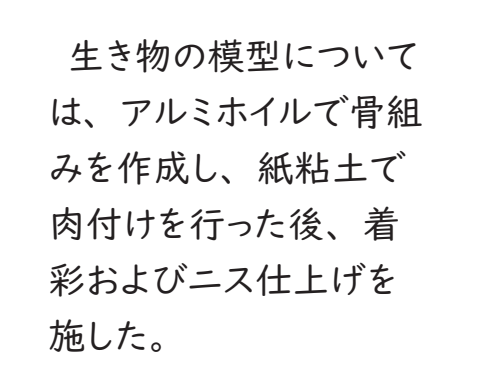
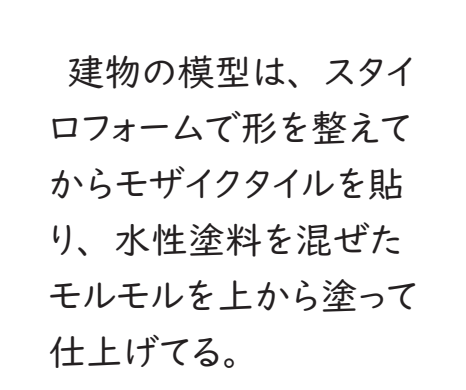
“こぼれタイル” 廃材の再利用



株式会社オザワモザイクワークスの協力のもと、製造過程で欠けや形の不揃いによって生じ、廃棄予定であったモザイクタイル「こぼれタイル」や使用されなくなった資材、サンプルの提供を受け、制作素材として活用した。

工場見学や現地調査で得た知見をもとに、素材の特性や背景を踏まえながら表現方法を検討し、調査と制作を往復する形で制作を進めた。

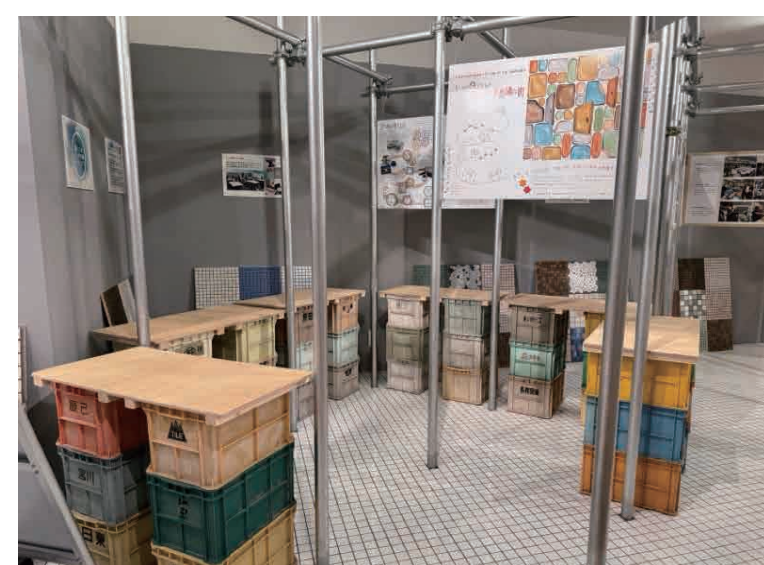
模型



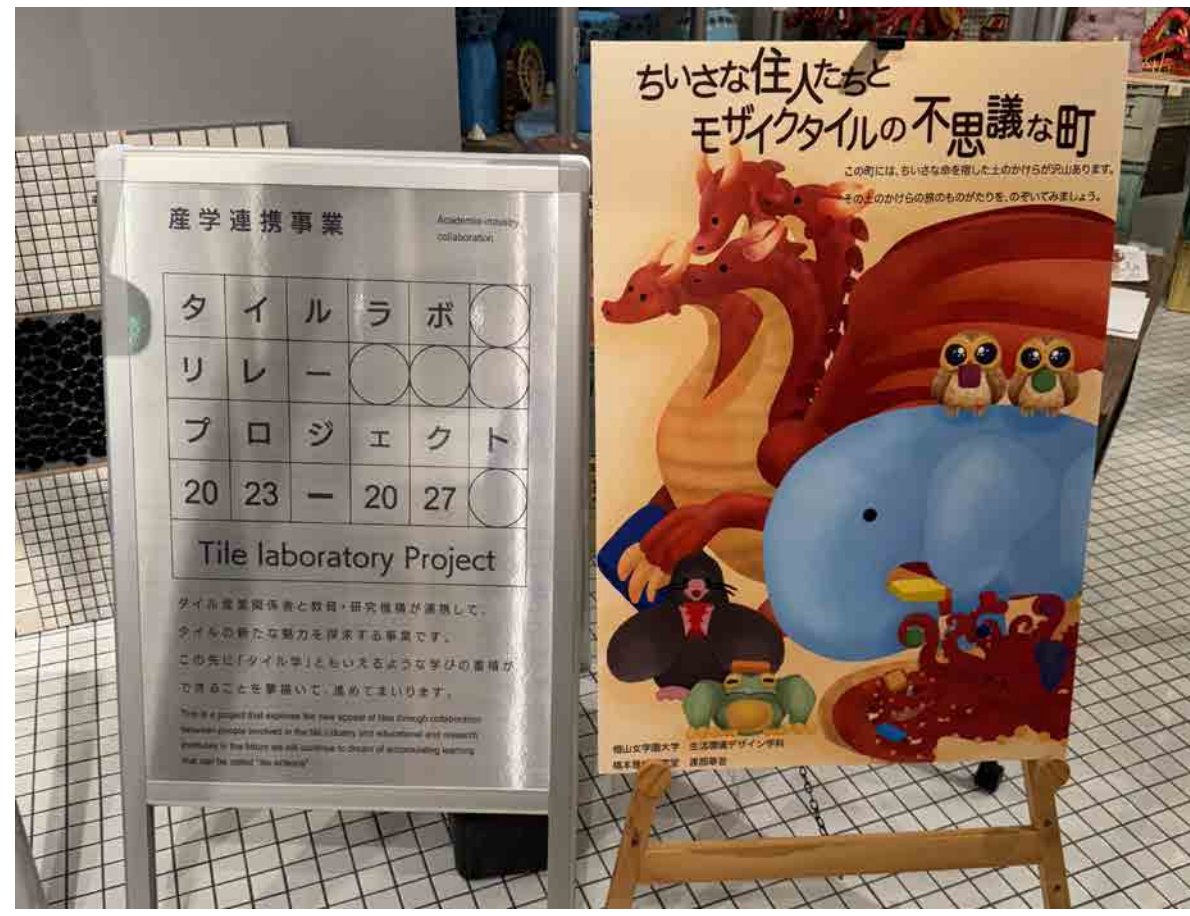
建物の模型は、スタイロフォームで形を整えてからモザイクタイルを貼り、水性塗料を混ぜたモルタルを上から塗って仕上げる。

生き物の模型については、アルミホイルで骨組みを作成し、紙粘土で肉付けを行った後、着色およびニス仕上げを施した。

展示台



展示の土台には、工場で実際に使用されていたタイル用コンテナを再利用した。
内部に重りを入れることで展示物の安定性を確保するとともに、工場名の表記や使用痕跡をあえて残している。



本展示は、多治見市モザイクタイルミュージアム2階展示スペースを使用し、来場者が町を「巡る」ように体験できる空間構成を計画した。展示全体をひとつの町として捉え、製造工程の流れに沿って建物や生き物を組み合わせて表現している。自然と視線と動線が工程順に進む構成としている。

展示

1. 原料



- ・地中でモザイクタイルのもととなる土を掘り出す役割を持つ、手のお大きなモグラ。
- ・大きな手で素材を集め、町の“はじまり”を支える存在。
- ・原料を生み出す工程を、生命の根っことして表現している。

2-2. 湿式押出成形



- ・長い鼻で土を押し出し、形をつくる鼻の大きなゾウ。
- ・鼻先から吹く風で湿ったタイルを乾かしながら、湿式押出成形から乾燥までの工程を担っている。
- ・ゆっくりと息を吹くように、素材が形へと変わっていく過程を象徴している。

4. 焼成



- ・モザイクタイルを熱い炎で覆う4つの頭を持つドラゴン。
- ・4つの頭はそれぞれ「乾燥」「予熱」「焼成」「冷却」を象徴しており、火を自在にあやつりながら、素材を強く美しく変化させる存在。
- ・モザイクタイルが「土」から「素材」へと生まれ変わる瞬間を表す。

2-1. 乾式プレス成形



- ・乾いた粉状の土を足で踏み固め、しっかりとした形に仕上げる足の大きなカエル。
- ・強い脚力で圧をかける姿は、乾式プレス成形の工程を象徴している。
- ・“力”と“リズム”で形をつくる存在として、町の中で重要な役割を担う。

3. 釉薬



- ・13本の足で色を操るタコ。
- ・日本産業規格（JIS）有彩色10色、無彩色3色を使い分けながら、モザイクタイル一枚一枚に命の“表情”を与える。
- ・釉薬の多様な色と質感を、タコの足の動きと重ねて表現している。

5. 検品



- ・焼成を終えたタイルたちを、静かに見守る目の大きなフクロウ。
- ・フクロウの大きな目は、昼も夜もわずかな傷や色の違いを見逃さない。
- ・タイルの表情・寸法・強さをひとつずつ確かめ、モザイクタイルを厳選します。
- ・「品質」を守る最後の門番。

フライヤー



展示の広報においては、「モザイクタイルに命が宿る町」という世界観と制作意図が、来場者に直感的に伝わることを重視した。

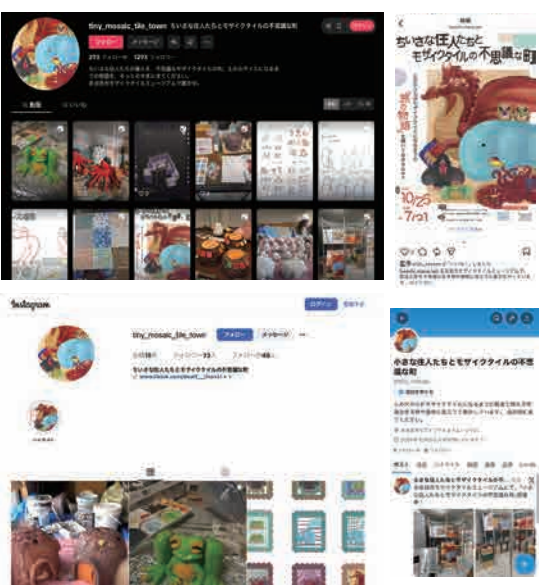
アンケート調査



展示では、来場者の反応や展示内容の理解度を把握することを目的として、アンケート調査を実施した。アンケート回答促進を目的として、2026年1月の調査以降回答者に対し、本展示の世界観を象徴する「切手風シール」を配布した。



SNS 運用



SNS（Instagram、TikTokなど）を活用し、制作過程や展示の一部を発信することで、展示への関心を高めるとともに、モザイクタイルや素材そのもののへの親しみを喚起することを目指した。